2022.7.27	図書館だより	水沢高校図書館 №6

特別展「ポンペイ」を見に行こう 開催

← 炭化したパン

↑ ポンペイの様子が見られます

↑ うつ伏せで亡くなった遺体の石膏像

図書館主催の“特別展「ポンペイ」を見に行こう”を７月 24 日（日）に行い、26 名で仙台市の宮城県美術館へ行ってきました。

雨続きの天候のなか、幸いこの日は晴天でした。水沢駅 6 時 15 分発の普通列車に乗り、8 時 35 分に仙台駅に着き、２キロほど歩いて宮城県美術館に到着しました。

ポンペイは、南イタリアにあったローマ時代の古代都市です。人口は１万人程度であったと推測されています。西にナポリ湾を望むこの街は、風光明媚で大地は肥沃、交通の要衝でもあり、紀元前２世紀ごろから大きく栄えていました。紀元 79 年に街の北西にあるヴェスヴィオ山の噴火による火砕流で、すべてが埋没してしまいました。ポンペイの家々や神殿、美術品、家財道具は短時間で噴火堆積物の下に閉じ込められ、18 世紀に発掘され始めるまで、誰にも手をつけられることなく眠り続けてきました。発掘された遺跡からは、当時の人の住居や生活の調度品、遺体の痕跡までそのまま出土しています。展覧会では、ナポリ国立考古学博物館のもと、日本初公開を含む約 130 点を展示、ポンペイの豊かな暮らしを、発掘の成果をもとに紹介しているものです。

到着後、チケットを購入し、２時間後に集合として館内自由観覧としました。

会場に入るやいなや展示されていたのが、女性犠牲者の石膏像でした。人間が噴火の堆積物に埋もれ、その後それが朽ちて、そこに遺体の形で空洞ができました。そこに石膏を流し込み、固まってから掘り出したものがこれです。亡くなった瞬間の住民の姿がわかる石膏像です。テレビ番組等で見られ、有名なものですが、実物を生で見ると、それが石膏像でありながらも、亡くなった瞬間の形であるため、身の毛もよだつような感動がありました。

また、金で作られたアクセサリー、ガラス食器、住居の壁に飾られたフレスコ画…次々に展示が続きました。熱風で炭化したパンはそのままの形で黒焦げになっていました。ブロンズで作られた水道管は街中に張り巡らされていたそうで、この時代の日本が弥生時代晩期であったことを思うと、その技術の高さを実感させられます。これを見て会話している生徒の様子にも、その感動があらわれていました。

展示品の写真撮影も自由にできたので、生徒は大いに楽しめたようでした。

展示室を出たところには、展覧会関連の特設ショップがありました。展示品をモチーフにした文具、小物、アクセサリー、ぬいぐるみ、レプリカ…が販売されており、生徒はこれにも興味津々で、たくさんの買い物をしたようです。

館内見学２時間は長すぎるかと思いましたが、ちょうどよい時間でした。

今回の企画の目的は、「ポンペイ展」とともに、生徒諸君が見たことない、行ったことがない大型書店に行き、本の豊富さに触れさせることでした。

お昼過ぎ、仙台駅前の「AER」という商業施設の１階にある大型書店「丸善」でいったん解散しました。この４階にはこれも大型の文房具店があり、生徒は有意義に時間を過ごせたようです。

ちなみに「丸善」は東京日本橋に本店がある明治２年創業の老舗書店です。文明開化とともに洋書の輸入販売の草分けでもあります。余談ですが、「ハヤシライス」は創業者の早矢仕有的（はやしゆうてき）が考案したものとされ、本店はじめ、各支店に併設されているカフェには、このハヤシライスがあります。

16 時 20 分に仙台駅に集合し列車に乗りましたが、帰路の荷物は、ポンペイのお土産と購入した本で重そうでした（本は特に重くなる。これを予想してキャリーバッグを持参した人もいて、これは流石！）。

19 時に水沢駅に到着、解散という一日でした。

今回、COVID-19 感染拡大の時期にあたり、参加申し込みをしながら参加を取りやめた生徒もいて、気の毒でした。

好評でしたので、また企画をします。

楽しみにしてください。

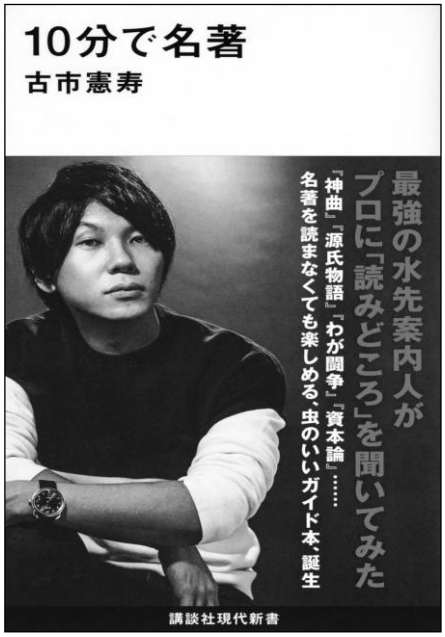
特別展「ポンペイ」は、9 月 25 日(日)まで宮城県美術館で開催されています

Mizuko Style ～深く味わい、じっくり考える～

図書館から本の紹介

・2084 年のＳＦ
【編】日本ＳＦ作家クラブ

2084 年の世界を舞台にしたＳＦが 23 篇。
第二次大戦後の 1984 年、ジョージ・オーウェルは 1984 年を舞台にしたディストピア小説を発表した。それから 100 年後の 2084 年を舞台に、現代のＳＦ作家たちはどんな世界を描くのか？



・10 分で名著
【著】古市憲寿

12 の名著を、訳者などその道のスペシャリストの話を交えながら紐解いていく。

『神曲』 『源氏物語』
『失われた時を求めて』 『相対性理論』
『社会契約論』 『ツァラトゥストラ』
『わが闘争』 『ペスト』 『古事記』
『風と共に去りぬ』 『国富論』 『資本論』

・ふたりのママから、きみたちへ
【著】東小雪/増原裕子

東京ディズニーリゾートで同性結婚式を行ったふたりが、子どもを迎える準備をはじめた…。新しい時代の“家族のかたち”を模索する、静かな問題作！

・現代思想入門
【著】千葉雅也

現代思想とはフランスの現代思想のこと。この本では、20 世紀後半に活躍した 3 人の哲学者を取り上げている。人々が、1 つの価値を信じて目指すというのではなく、20 世紀後半に世の中の多様化が進んでいく過程で、世界をどう捉え直すか、世界と人間のあり方を考え直そうとした哲学です。それを 21 世紀の世界の中で、もう 1 度読み直す必要があると著者はいいます。

・13 歳からのアート思考
【著】末永幸歩

「アート思考の『アート』は表現技法ではなく、自身の視点でものごとをとらえ、解釈し、表現することです。美術の本来の目的は、常識的なものの見方から離れ、自分なりの答えをつくる力を育むことです」
と著者の末永さんは話します。

・あなたのセックスが楽しくないのは資本主義のせいかもしれない
【著】クリステン・R・ゴドシー

ピンクの装丁と尖った書名にドキリ！
読んでみた生徒の評価は、「面白かった」「読んでよかった」と、とても好評でした。
さて、さて、その内容は…？

夏休み 読破しなくていいから、ちょっと本を手にしてみよう